

平成27年度
日本短角種の経営に関する調査報告書

平成28年2月

alic 独立行政法人農畜産業振興機構

はじめに

この報告書は、一般社団法人食品需給研究センターに委託して実施した平成27年度日本短角種の経営に関する調査の成果を取りまとめたものである。

日本短角種は、放牧による低コスト生産に適した品種であり、中山間地域の畜産経営の一形態として、また、飼料自給率の向上や地域経済の活性化、自然環境の保全などにおいて重要な役割が期待されている。「酪農及び肉用牛生産の近代化を図るための基本方針」（平成27年3月）においても、「褐毛和種、日本短角種等の特色ある品種や地域の飼料資源を活用するなど、多様な肉用牛、牛肉の生産を推進する。」としている。しかしながら、日本短角種牛肉は肉用牛の品種間競合などから子牛価格・枝肉価格の価格形成力が弱く、飼養農家戸数や飼養頭数は減少傾向にある。

このような状況下において、日本短角種の生産実態が十分に把握されていないことから、日本短角種の子牛・肥育牛に関する生産費などについて、基礎データを把握し、関連施策の推進に資することを目的として調査結果を取りまとめた。

本報告書が日本短角種の生産農家及び関係者に広くご活用いただき、今後における何らかの参考になれば幸いである。

最後に、本調査の実施にあたってご協力いただいた調査対象農家、関係者各位に深甚の謝意を表する次第である。

平成28年2月

独立行政法人農畜産業振興機構

目次

【調査概要】	1
【要約版】	3
【詳細版】	6
I 調査結果	6
1 日本短角種の経営概況	6
(1) 繁殖経営	6
(2) 繁殖・肥育一貫経営	7
2 日本短角種の生産費	8
(1) 子牛生産費	8
(2) 肥育牛生産費	10
3 日本短角種の経営実績	12
(1) 繁殖経営	12
(2) 肥育経営	14
4 今後の経営意向と規模拡大の課題・問題点	16
(1) 今後の経営意向	16
(2) 規模拡大の課題・問題点	19
II 日本短角種の経営動向	21
1 日本短角種の飼養動向	21
(1) 全国の飼養動向	21
(2) 岩手県の飼養動向	22
2 日本短角種の子牛価格動向	24
3 日本短角種の収益性	26
(1) 繁殖経営	26
4 日本短角種の生産・流通の現状と課題	28

【調査概要】

1 調査の目的

日本短角種については、生産費などに関する統計調査がなく、生産実態が十分に把握されていないことから、日本短角種の収益性などの検討に必要な資料の整備を図ることを目的として、調査を実施したものである。

2 調査の内容

日本短角種の繁殖・肥育経営 45 経営体を対象として、農林水産省の「肉用牛生産費調査（支払利子・地代算入生産費）」に準じ、経営概況、生産費、経営実績などについて現地調査による聞き取りを行い、飼養頭数規模別にとりまとめた。

3 調査対象の選定

日本短角種は、岩手県のほか、秋田県、青森県、北海道などの一部の地域で飼養されている。調査対象の選定は、各道県の飼養戸数の分布を考慮した上で、協力の得られる経営体を有意抽出して行った。試験研究を目的とした経営体や趣味的に飼養している経営体は除外した。なお、日本短角種は、肥育のみを行う農家が少ないことから、肥育牛生産費については、繁殖・肥育一貫経営（24 経営体）の肥育部門に係るデータ及び肥育経営（3 経営体）のデータを用いた。

調査対象経営体数

	経営体数					生産費の標本として使用した経営体数		
	計	繁殖経営	繁殖・肥育 一貫経営	肥育経営		計	子牛 生産費	肥育牛 生産費
計	45	18	24	3	⇒	51	24	27
北海道	3	—	2	1	⇒	3	—	3
青森県	1	—	1	—	⇒	1	—	1
岩手県	37	15	20	2	⇒	43	21	22
秋田県	4	3	1	—	⇒	4	3	1

注：岩手県の子牛生産費の経営体数は、繁殖経営 15 戸と、一貫経営 24 戸のうち 6 戸を抽出し、計 21 戸とした。

標準誤差率

子牛生産費 : 4.94%

肥育牛生産費 : 3.25%

調査対象頭数

子牛 : 156 頭

肥育牛 : 742 頭

4 調査対象の期間

平成26年4月1日から平成27年3月31日までの1年間である。

5 調査の方法

現地調査による聞き取りにより実施した。

6 利用上の留意点

農林水産省の「肉用牛生産費調査」は、肥育牛のように生産期間が長期にわたるものについては、過年度の肥育期間開始時からの経費の記録に基づく調査により算出している。

一方で、本調査は、日本短角種の経営体における平成26年度（平成26年4月1日から平成27年3月31日）を対象として実施したものであり、もと畜費や飼料費、また、飼養頭数や販売頭数に大きな変動がある場合は、留意する必要がある。なお、生産費の各項目は全て消費税込額とした。

子牛生産費：繁殖部門の生産費を当該年度子牛販売頭数で除して1頭当たりの生産費を算出したものである。

肥育牛生産費：肥育部門の生産費を当該年度肥育牛販売頭数で除して1頭当たりの生産費を算出したものである。

家族労働費：日本短角種の生産に係る家族労働時間に、「毎月勤労統計調査」（厚生労働省）の建設業、製造業及び運輸業・郵便業に属する5～29人規模の事業所における賃金データ（都道府県単位）を基に算出した男女同一単価（当該地域で男女を問わず実際に支払われた平均賃金）を乗じて算出したものである。

【要約版】

1 子牛生産費

日本短角種の子牛1頭当たり生産費は、303,599円となっている。内訳は、飼料費16.0%、労働費36.0%、減価償却費14.8%、放牧預託費（種付費含む）11.4%、獣医師料及び医薬品費1.4%、その他20.4%である（図1、表1）。前年度と比べて、放牧預託費を除き減少し、全体ではかなりの程度減少となっている。これは前年と比べて比較的規模の大きい繁殖・肥育の一貫経営体が増加したことにより、自給飼料費、労働費、減価償却費等が減少したことが要因となっている。

1頭当たり所得は、178,514円（前年度107,591円）と前年度と比べて大きく増加した。これは、子牛販売価格が高騰したためである。

平成26年度の1頭当たり所得は、178,514円＝372,725円－（303,599円－109,388円）

注：1頭当たり所得は、粗収益（子牛販売価格）－（生産費－労働費）により算出

図1 日本短角種の子牛生産費（1頭当たり）

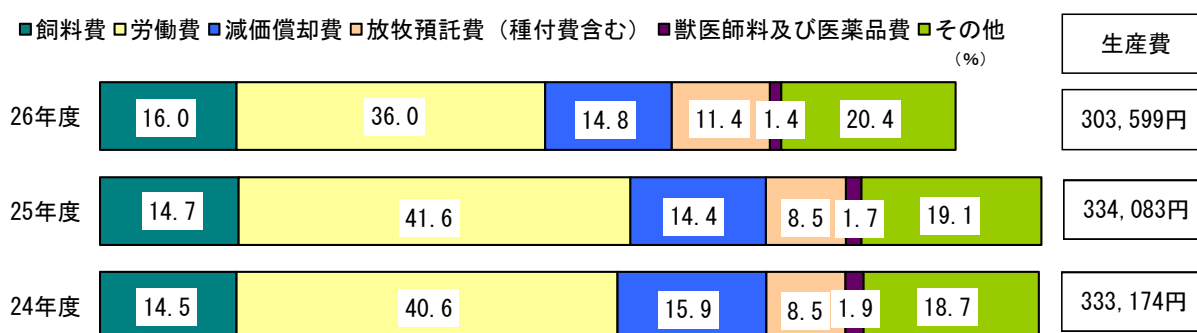


表1 日本短角種の子牛生産費（1頭当たり）

(円)

	経営体数	生産費	飼料費		労働費	減価償却費	放牧預託費（種付費含む）	獣医師料及び医薬品費	その他			
			購入	自給								
年度別	26年度	24	303,599	48,565	33,250	15,315	109,388	45,032	19,081	34,721	4,104	61,788
	うち、岩手県	21	298,909	47,651	32,871	14,780	105,770	44,856	19,257	34,846	4,079	61,707
	25年度	21	334,083	49,186	29,026	20,160	139,103	48,065	15,063	28,360	5,587	63,783
	うち、岩手県	18	327,006	48,401	28,063	20,338	132,050	49,341	15,064	27,981	5,489	63,744
	24年度	21	333,174	48,436	32,084	16,352	135,181	52,820	15,734	28,165	6,310	62,261
	うち、岩手県	18	332,576	47,852	31,235	16,617	131,265	54,542	16,158	28,908	6,065	63,945
飼養規模別	1～4頭	4	422,724	67,543	44,558	22,985	203,006	69,574	26,521	29,494	4,754	48,353
	5～9頭	8	379,561	54,621	34,262	20,360	175,336	62,981	18,030	32,680	6,052	47,890
	10頭以上	12	285,094	46,703	32,607	14,096	93,724	40,807	18,966	35,301	3,728	64,833

注1：飼養規模は繁殖雌牛の飼養頭数による。

注2：生産費は、支払利子及び支払地代を含む。

注3：飼料費には配合飼料価格安定制度の補てん金は含まない。

注4：経営体数は繁殖経営18戸と一貫経営の繁殖部門6戸の計24戸とした。

注5：その他は光熱動力費、その他諸材料費、賃借料及び料金、物件税及び公課諸負担、小農機具費、生産管理費、修繕費、支払利子、支払地代。

2 肥育牛生産費

日本短角種の肥育牛1頭当たり生産費は、858,584円となっている。内訳は、飼料費30.7%、もと畜費35.7%、労働費13.8%、減価償却費4.2%、その他15.7%である（図2、表2）。前年度と比べて、特にもと畜費が増加している。また、飼料費、労働費、減価償却費も増加している。

1頭当たり所得は、▲147,299円（前年度▲134,471円）となっており、前年度と比べて大きく減少した。これは、肥育牛販売価格が上昇したものの、もと畜費が大幅に増加し、その他の生産費も増加したことによるものである。もと畜費は前年度に続き大幅に増加している。

平成26年度の1頭当たりの所得は、▲147,299円＝593,170円－（858,584円－118,115円）

注：1頭当たり所得は、粗収益（肥育牛販売価格）－（生産費－労働費）により算出

図2 日本短角種の肥育牛生産費（1頭当たり）

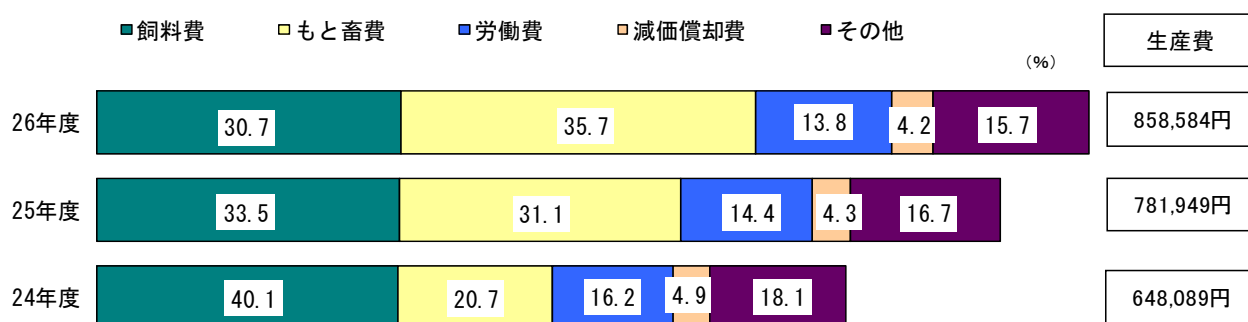


表2 日本短角種の肥育牛1頭当たり生産費

(円)

	経営 体数	生産費	飼料費		もと畜費	労働費	減価 償却費	その他		
			購入	自給						
年度別	26年度	27	858,584	263,504	242,484	21,020	306,561	118,115	35,699	134,704
	うち、岩手県	22	880,819	248,853	229,072	19,781	323,027	123,343	40,805	144,791
	25年度	23	781,949	262,286	239,001	23,284	243,409	112,725	33,284	130,245
	うち、岩手県	18	820,611	246,342	229,083	17,260	266,148	121,117	43,679	143,325
	24年度	23	648,089	259,934	240,746	19,188	134,228	105,037	31,590	117,300
	うち、岩手県	18	661,450	246,540	232,983	13,557	141,264	108,754	41,584	123,308
飼養規模別	1～10頭未満	2	1,165,804	267,752	221,454	46,298	392,773	259,813	18,826	226,641
	10～20頭	4	1,032,785	253,469	227,767	25,702	302,860	228,665	81,682	166,110
	20～30頭	5	1,027,364	276,079	244,636	31,443	344,295	158,966	61,363	186,661
	30～50頭	6	903,585	257,945	233,971	23,974	280,713	156,959	37,339	170,629
	50～100頭	5	878,711	263,606	241,139	22,467	303,237	126,881	44,842	140,145
	100頭以上	5	771,457	262,980	247,257	15,723	305,565	78,541	21,937	102,435

注1：飼養規模は肥育牛の飼養頭数による。

注2：生産費は、支払利子及び支払地代を含む。

注3：飼料費には配合飼料価格安定制度の補てん金は含まない。

注4：その他は光熱動力費、その他諸材料費、獣医師及び医薬品費、賃借料及び料金、物件税及び公課諸負担、小農機具費、生産管理費、修繕費、支払利子、支払地代。



日本短角種の夏山冬里方式による放牧風景

【詳細版】

I 調査結果

1 日本短角種の経営概況

(1) 繁殖経営

日本短角種の繁殖経営（18経営体）の概況をみると、農業従事人数が家族主体に2.3人、経営耕地面積が田畑合わせて162a、牧草地・採草地在り1,641a（共同利用地含む）、日本短角種の繁殖雌牛飼養頭数が11.0頭となっている（表3）。

日本短角種とその他の品種で構成される肉用牛収入（4,414千円）のうち、日本短角種は平均3,230千円（前年度2,291千円）となった。26年度は主に子牛価格の高騰が収入の増加に寄与している。肉用牛収入を飼養規模別にみると、1～4頭が2,519千円、5～9頭が2,112千円、10頭以上が7,799千円となっており、1～4頭の小規模層ではその他の品種との兼業が主体であることから、5～9頭層よりも多くなっているものの、肉用牛収入に占める日本短角種の割合は約4割弱に過ぎない。また、肉用牛以外の畜産収入が49千円、田畑などの作目販売収入が1,604千円、農外収入が809千円であり、1経営体当たり収入の合計は6,876千円となっている。

表3 日本短角種の繁殖経営の概況

	経営体数	繁殖雌牛飼養頭数		農業従事人数		労働時間		経営面積					農業収入				農外収入		
		うち、日本短角種	うち、日本短角種	家族	雇用	家族	雇用	田	畑	畜舎・放牧地・採草地	山林その他	肉用牛収入		肉用牛以外の収入					
												(頭)	(頭)	(人)	(人)	(時間)		(時間)	(a)
26年度	18	14.0	11.0	2.0	0.3	80.7	1.3	1,975	71	91	1,641	173	6,067	4,414	3,230	49	1,604	809	
うち、岩手県	15	13.6	12.2	2.3	0.3	77.1	1.5	2,271	46	77	1,940	207	6,391	5,045	3,605	59	1,286	614	
25年度	21	12.5	9.0	2.3	0.3	81.5	2.1	1,767	67	81	1,419	201	5,237	3,833	2,291	26	1,377	848	
うち、岩手県	18	11.6	9.8	2.3	0.3	76.0	2.3	1,981	45	65	1,637	234	5,299	4,234	2,493	30	1,035	645	
24年度	21	13.0	9.7	2.1	0.3	82.4	1.7	1,786	62	74	1,450	201	4,096	2,799	1,154	45	1,251	827	
うち、岩手県	18	11.4	10.2	2.2	0.3	79.3	1.9	1,980	44	64	1,638	234	4,098	2,933	1,233	35	1,130	663	
飼養規模別	1～4頭	4	8.4	3.1	3.3	1.0	119.8	0.0	4,492	58	55	4,254	125	3,887	2,519	933	50	1,318	605
5～9頭	7	6.6	6.6	2.5	0.1	109.8	3.1	320	113	98	109	0	4,771	2,112	1,985	19	2,640	1,114	
10頭以上	7	24.6	19.9	1.3	0.1	66.8	0.8	2,192	35	104	1,679	373	8,610	7,799	5,788	80	730	620	

注1：飼養規模は繁殖雌牛の飼養頭数による。

注2：労働時間は、子牛1頭当たりである。

注3：粗収益（日本短角種）には、肉用子牛生産者補給金等の補助金は含まない。

注4：経営体数は繁殖経営18戸とした。

(2) 繁殖・肥育一貫経営

日本短角種の経営概況は、肥育のみを行う農家が少ないことから、繁殖・肥育一貫経営（24 経営体）及び肥育経営（3 経営体）のデータを用いた。

日本短角種の繁殖・肥育経営（27 経営体）（以下「肥育経営」という。）の概況をみると、農業従事人数が家族主体に3.0人、経営耕地面積が田畑合わせて404a、牧草地・採草地在り1,970a、日本短角種の肥育牛飼養頭数が50頭となっている（表4）。

日本短角種とその他の品種で構成される肉用牛収入(34,082千円)のうち、日本短角種は平均18,329千円(前年度18,791千円)となっており、出荷頭数の減少などにより前年度と比べて減少した。飼養規模別にみると、1～10頭未満が9,577千円、100頭以上が72,083千円と概ね規模が大きくなるほど増加している。

田畑などの作目販売収入が1,503千円、農外収入が1,766千円であり、1経営体当たり収入の合計は38,674千円となっている。なお、肉用牛収入には東日本大震災による東京電力の補償が含まれている点に留意する必要がある。

表4 日本短角種の肥育経営の概況

	経営体数	繁殖雌牛飼養頭数		肥育牛飼養頭数		農業従事人数		労働時間		経営面積					農業収入					農外収入	
		うち、日本短角種	うち、日本短角種	家族	雇用	家族	雇用	田	畑	畜舎・放牧地・採草地	山林その他	肉用牛収入			肉用牛以外の収入						
												(頭)	(頭)	(人)	(人)	(時間)	(時間)	(a)	(a)		(a)
26年度	27	32	21	65	50	2.0	1.0	52.3	16.8	2,667	92	312	1,970	293	36,908	34,082	18,329	1,324	1,503	1,766	
うち、岩手県	22	26	16	65	47	2.6	1.1	58.4	12.1	2,036	108	329	1,274	325	31,836	28,616	17,279	1,625	1,596	1,946	
25年度	23	34	24	59	53	2.3	1.2	48.9	19.2	2,782	105	302	2,169	207	37,915	35,567	18,791	709	1,639	2,293	
うち、岩手県	18	29	18	55	48	2.6	1.1	59.2	13.1	2,042	128	319	1,373	222	26,225	23,559	16,518	905	1,762	2,795	
24年度	23	36	24	66	58	2.3	1.2	47.7	15.8	2,776	102	299	2,169	207	38,477	36,968	19,739	385	1,124	3,463	
うち、岩手県	18	27	19	59	51	2.6	1.1	57.7	9.9	2,035	124	315	1,373	222	24,167	22,600	17,922	408	1,158	4,364	
飼養規模別																					
1～10頭未満	2	34	21	7	7	1.5	0.0	147.5	0.0	1,208	75	245	888	0	9,772	9,577	7,331	0	195	825	
10～20頭	4	5	3	16	13	3.0	1.0	126.1	5.3	2,378	55	110	1,151	1,063	7,826	6,020	3,975	0	1,806	657	
20～30頭	5	22	14	29	26	1.4	0.4	84.8	2.6	2,850	8	444	1,966	432	24,124	20,431	11,441	3,201	491	1,529	
30～50頭	6	35	13	58	38	1.8	0.5	61.8	29.2	3,408	336	379	2,693	0	40,446	36,002	11,989	226	4,218	2,906	
50～100頭	5	43	24	64	64	1.6	1.4	53.6	21.2	2,532	5	268	2,259	0	41,684	39,679	23,061	1,886	119	1,267	
100頭以上	5	49	46	170	120	2.4	2.4	32.5	16.4	2,545	7	334	1,904	300	74,792	72,083	43,976	1,789	920	2,396	

注1：飼養規模は肥育の飼養頭数による。

注2：労働時間は、肥育牛1頭当たりである。

注3：粗収益（日本短角種）には、肉用牛肥育経営安定対策事業の補てん金等の補助金は含まない。

2 日本短角種の生産費

(1) 子牛生産費

平成26年度における日本短角種の子牛1頭当たり生産費は、303,599円となっており、対前年度比で9.1%とかなりの程度減少した。これは前年度と比べて比較的規模の大きい繁殖・肥育の一貫経営体が増加したことにより、自給飼料費、労働費、減価償却費等が減少したことが要因となっている。

内訳は、労働費が109,388円（構成比36.0%）で最も多く、次いで、飼料費48,565円（同16.0%）、減価償却費45,032円（同14.8%）、放牧預託費34,721円（同11.4%）等である。対前年度比で購入飼料費が増加したものの、自給飼料費、労働費、減価償却費が減少となっている。

日本短角種の繁殖経営においては、春から秋にかけて母牛と子牛を放牧に出す「夏山冬里方式」が主体であり、粗飼料の利用性が高く、手間がかからないという利点がある。そのため、他の肉用牛と比較して、特に飼料費が低くなっている。なお、日本短角種は種雄牛と繁殖雌牛を一緒に放牧して自然交配するため、種付費は放牧預託費の一部として取り扱われている（図3、表5）。

1頭当たり所得は、178,514円（前年度107,591円）と前年度と比べて大きく増加した。これは、主に子牛販売価格が高騰したためである。

平成26年度の1頭当たり所得は、178,514円＝372,725円－（303,599円－109,388円）

注：1頭当たり所得は、粗収益（子牛販売価格）－（生産費－労働費）により算出

図3 日本短角種の子牛1頭当たり生産費

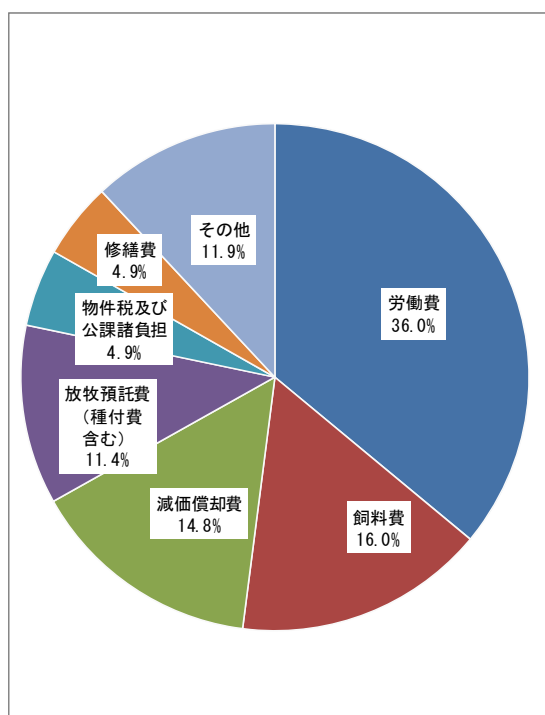


表5 日本短角種の子牛生産費（1頭当たり）

	経営 体数	生産費	購入 飼料費	自給飼料費			敷料費			光熱 動力費	その他諸 材料費	
				種苗費・ 肥料費	有市価額	種苗費・ 肥料費	購入	自給				
26年度	24	303,599	33,250	15,315	14,358	957	6,605	5,002	1,603	11,998	4,954	
うち、岩手県	21	298,909	32,871	14,780	14,261	519	6,647	5,124	1,522	11,955	5,050	
飼養 規模 別	1～5頭未満	4	422,724	44,558	22,985	21,265	1,720	6,736	4,576	2,160	10,947	2,718
	5～10頭	8	379,561	34,262	20,360	17,633	2,727	3,713	2,748	964	8,446	3,913
	10頭以上	12	285,094	32,607	14,096	13,488	608	7,120	5,425	1,695	12,679	5,232

続き 日本短角種の子牛生産費（1頭当たり）

	経営 体数	獣医師料 及び医薬 品費	賃借料及 び料金	物件税及 び公課諸 負担	放牧預託 費（種付 費含む）	減価償却費	減価償却費			小農 機具費	生産 管理費	
							家畜	建物・ 構造物	農機具・ 車輛			
26年度	24	4,104	2,004	14,993	34,721	45,032	19,081	8,261	17,690	1,928	2,603	
うち、岩手県	21	4,079	1,904	15,045	34,846	44,856	19,257	8,470	17,129	1,973	2,377	
飼養 規模 別	1～5頭未満	4	4,754	3,908	14,088	29,494	69,574	26,521	4,784	38,269	2,270	1,432
	5～10頭	8	6,052	672	12,510	32,680	62,981	18,030	11,706	33,245	5,104	2,964
	10頭以上	12	3,728	2,166	15,476	35,301	40,807	18,966	7,784	14,056	1,343	2,585

続き 日本短角種の子牛生産費（1頭当たり）

(円)

	経営 体数	修繕費	修繕費		労働費			副産物 価額	支払利子	支払地代	
			建物・ 構造物	農機具・ 車輛	雇用	家族					
26年度	24	14,726	3,390	11,336	109,388	9,083	100,305	18	952	1,025	
うち、岩手県	21	14,825	3,483	11,342	105,770	9,463	96,307	19	913	1,018	
飼養 規模 別	1～5頭未満	4	5,362	1,000	4,362	203,006	0	203,006	534	0	893
	5～10頭	8	8,863	2,695	6,169	175,336	3,909	171,427	0	942	763
	10頭以上	12	16,162	3,613	12,549	93,724	10,383	83,341	0	993	1,078

注1：飼養規模は繁殖雌牛の飼養頭数による。

注2：生産費は、支払利子及び支払地代を含む。

注3：飼料費には配合飼料価格安定制度の補てん金は含まない。

注4：経営体数は繁殖経営18戸と一貫経営の繁殖部門6戸の計24戸とした。

注5：生産費（計）には副産物価額が含まれないので、費目を積み上げた金額と一致しない。

(2) 肥育牛生産費

日本短角種の肥育牛1頭当たり生産費は、858,584円となっている。対前年度比で9.8%とかなりの程度増加した。これは対前年比でもと畜費が大幅に増加したことが大きな要因である。

内訳は、もと畜費306,561円（構成比35.7%）で最も高く、前年度に比べて25.9%の増加となっている。次いで、飼料費が263,504円（30.7%）、労働費118,115円（13.8%）、減価償却費35,699円（4.2%）等である（図4、表6）。対前年度比で購入飼料費、もと畜費、労働費、減価償却費が増加となっている。

1頭当たり所得は、▲147,299円（前年度▲134,471円）となっており、前年度と比べて大きく減少した。これは、肥育牛販売価格が上昇したものの、もと畜費が大幅に増加し、その他の生産費も増加したことによるものである。

平成26年度の1頭当たりの所得は、▲147,299円＝593,170円－（858,584円－118,115円）

注：1頭当たり所得は、粗収益（肥育牛販売価格）－（生産費－労働費）により算出

図4 日本短角種の肥育牛生産費（1頭当たり）

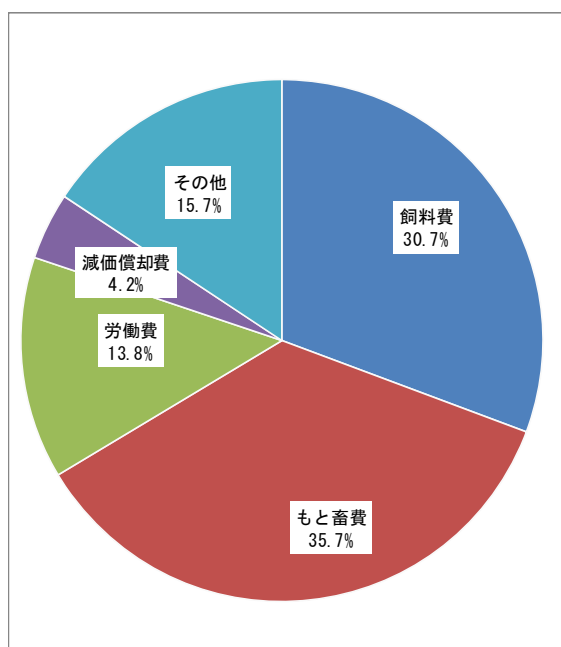


表6 日本短角種の肥育牛生産費

	経営 体数	生産費	購入 飼料費	自給飼料費			敷料費			光熱 動力費	その他諸 材料費	
				種苗費・ 肥料費	有市価額		購入	自給				
26年度	27	858,584	242,484	21,020	18,414	2,606	19,421	18,628	794	25,621	8,955	
うち、岩手県	22	880,819	229,072	19,781	19,781	0	19,424	18,974	449	25,737	10,142	
飼養規模別	1～10頭未満	2	1,165,804	221,454	46,298	46,298	0	5,257	5,257	0	36,782	27,101
	10～20頭	4	1,032,785	227,767	25,702	25,702	0	12,032	10,022	2,010	25,382	5,968
	20～30頭	5	1,027,364	244,636	31,443	27,986	3,457	33,916	30,230	3,687	36,947	12,315
	30～50頭	6	903,585	233,971	23,974	21,634	2,339	25,304	24,108	1,197	29,585	18,115
	50～100頭	5	878,711	241,139	22,467	22,467	0	12,205	12,205	0	27,209	6,761
	100頭以上	5	771,457	247,257	15,723	11,711	4,012	18,438	18,147	291	20,509	5,730

続き 日本短角種の肥育牛生産費

	経営 体数	獣医師料 及び医薬 品費	賃借料及 び料金	物件税及 び公課諸 負担	もと畜費	減価償却費			小農 機具費	生産 管理費		
						家畜	建物・ 構造物	農機具・ 車輛				
26年度	27	6,189	9,524	24,930	306,561	35,699	—	14,705	20,994	1,717	4,861	
うち、岩手県	22	6,537	11,055	28,607	323,027	40,805	—	16,005	24,799	1,811	5,808	
飼養規模別	1～10頭未満	2	20,269	21,422	42,919	392,773	18,826	—	8,726	10,100	10,803	6,070
	10～20頭	4	9,627	16,446	35,437	302,860	81,682	—	45,616	36,066	8,110	5,010
	20～30頭	5	8,273	12,553	33,448	344,295	61,363	—	23,521	37,842	1,441	7,686
	30～50頭	6	7,896	12,874	26,635	280,713	37,339	—	13,113	24,227	1,298	5,633
	50～100頭	5	3,380	10,149	38,419	303,237	44,842	—	16,032	28,811	1,236	7,950
	100頭以上	5	5,757	6,491	14,576	305,565	21,937	—	10,484	11,453	1,399	2,412

続き 日本短角種の肥育牛生産費

(円)

	経営 体数	修繕費			労働費			副産物 価額	支払利子	支払地代	
		建物・ 構造物	農機具・ 車輛		雇用	家族					
26年度	27	25,294	10,185	15,109	118,115	25,757	92,358	678	3,958	4,233	
うち、岩手県	22	28,816	11,895	16,921	123,343	20,347	102,997	124	3,583	3,271	
飼養規模別	1～10頭未満	2	44,274	30,862	13,412	259,813	0	259,813	0	1,270	10,473
	10～20頭	4	37,486	14,335	23,150	228,665	6,080	222,585	1,555	8,197	2,417
	20～30頭	5	27,165	12,379	14,786	158,966	8,480	150,486	0	8,047	4,870
	30～50頭	6	31,996	11,890	20,105	156,959	48,120	108,839	581	4,936	6,357
	50～100頭	5	25,736	13,365	12,372	126,881	32,560	94,321	0	3,031	4,069
	100頭以上	5	20,870	6,610	14,260	78,541	21,230	57,310	1,152	2,882	3,371

注1：飼養規模は肥育牛の飼養頭数による。

注2：生産費は、支払利子及び支払地代を含む。

注3：飼料費には配合飼料価格安定制度の補てん金は含まない。

注4：生産費（計）には副産物価額が含まれないので、費目を積み上げた金額と一致しない。

3 日本短角種の経営実績

(1) 繁殖経営

日本短角種の繁殖雌牛1頭当たりの年間子牛出荷頭数は0.78頭、出荷時体重は236.9kg、出荷月齢は7.2カ月となっている。

子牛販売価格は、平均372,725円（前年度302,571円）となっており、前年度と比べ大幅に上昇した（表7）。日本短角種の子牛販売は市場出荷頭数が133頭（85.3%）、農家間の相対取引頭数が23頭（14.7%）と市場出荷が主体であり、相対取引価格（373,986円）は市場出荷価格（372,506円）と相対取引価格が市場出荷価格より高くなっているものの、格差は小さい（表8）。

表7 日本短角種（繁殖経営）の経営実績

	経営 体数	繁殖雌 牛の平 均分娩 間隔 (月)	繁殖雌牛 1頭当 たり年 間子牛 出荷頭 数 (頭)	区分	子牛1頭当たり					
					販売価格 (円)	相対取引 価格 (円)		出荷時 体重 (kg)	出荷月 齢 (月)	
						市場出 荷 価格 (円)	相対取 引 価格 (円)			
年度別	26年度	18	12.2	0.78	平均	372,725	372,506	373,986	236.9	7.2
					去勢・雄	386,530	388,190	378,955	240.7	7.1
					雌	354,386	353,424	362,629	231.8	7.2
	うち、岩手県	15	12.1	0.78	平均	375,547	375,844	373,986	234.6	7.0
					去勢・雄	390,290	392,996	378,955	238.5	7.0
					雌	355,488	354,562	362,629	229.2	7.1
	25年度	21	12.3	0.83	平均	302,571	295,289	341,600	241.9	7.1
					去勢・雄	298,121	291,623	345,778	248.7	7.0
					雌	306,544	298,848	339,250	235.9	7.1
	うち、岩手県	18	12.3	0.82	平均	307,311	300,227	341,600	241.5	7.0
					去勢・雄	302,801	296,355	345,778	248.5	7.0
					雌	311,352	304,035	339,250	235.3	7.0
24年度	21	12.5	0.81	平均	143,406	143,003	145,275	251.0	6.9	
				去勢・雄	149,007	148,915	149,514	262.3	7.0	
				雌	136,872	135,660	141,566	237.9	6.9	
うち、岩手県	18	12.5	0.81	平均	144,102	143,818	145,275	249.9	6.9	
				去勢・雄	151,193	151,544	149,514	260.7	6.9	
				雌	136,233	134,736	141,566	237.8	6.9	
飼養規模別	1～4頭	4	11.8	0.83	—	373,032	381,343	364,720	247.8	7.0
	5～9頭	7	12.5	0.89	—	356,315	356,315	—	249.7	7.5
	10頭以上	7	12.1	0.75	—	378,677	379,105	376,560	231.1	7.0

注1：飼養規模は繁殖雌牛の飼養頭数による。

注2：経営体数は繁殖経営18戸とした。

相対取引を行っている経営体は、18 経営体中 3 経営体（全て岩手県）であり、全て県内の肥育農家に販売している。

表8 日本短角種（子牛）の販売先

	全体		市場出荷		相対取引							
	経営 体数	頭数 (頭)	経営 体数	頭数 (頭)	経営 体数	頭数 (頭)	県内・県外割合		相手先割合			
							県内 (%)	県外 (%)	個人 (%)	法人 (%)	家畜商 (%)	その他 (%)
26年度	18	156	15	133	3	23	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
うち、岩手県	15	144	12	121	3	23	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
25年度	21	159	18	134	3	25	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
うち、岩手県	18	146	15	121	3	25	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
24年度	21	169	18	139	3	30	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
うち、岩手県	18	154	15	124	3	30	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
飼養規模別												
1～4頭	4	10	2	5	2	5	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0
5～9頭	7	39	7	39	0	—	—	—	—	—	—	—
10頭以上	7	107	6	89	1	18	100.0	0.0	100.0	0.0	0.0	0.0

注1：飼養規模は繁殖雌牛の飼養頭数による。

注2：経営体数は繁殖経営18戸とした。

(2) 肥育経営

日本短角種の肥育牛の年間出荷頭数は27.5頭、出荷時体重は693.5kg、出荷月齢は27.7カ月となっている。牛肉の需要が回復し、日本短角種の出荷時期の是正から、前年度と比べて出荷月齢は0.6カ月、平均肥育日数は28日短くなっている。

肥育牛販売価格は、平均593,170円（前年度534,753円）となっており、前年度と比べて6万円程度増加している（表9）。要因として、子牛価格の上昇を契機に取引価格の見直しがなされたことから全体の販売価格を押し上げたことなどが挙げられる。

枝肉単価は1,372円/kgであり、同期間の交雑種B3等級と同等の水準となっている。景気回復による牛肉の需要拡大、肉用牛飼養頭数の減少などを背景に、黒毛和種をはじめとした他の肉用牛の枝肉価格と同様に日本短角種の販売価格は上昇傾向となっている。

表9 日本短角種（肥育経営）の経営実績

	経営 体数	年間 出荷 頭数 (頭)	区分	肥育牛1頭当たり												
				販売価格			出荷時 体重 (kg)	出荷月 齢 (月)	平均肥育 日数 (日)	増体重 (kg/日)	枝肉重量 (kg)	枝肉単価 (円/kg)	もと畜の 月齢 (月)	もと畜の 生体重 (kg)	もと畜の 購入価格 (円)	
				市場出荷 価格 (円)	相対取引 価格 (円)	販売価格 (円)										
年度別	26年度	27	27.5	平均	593,170	—	593,170	693.5	27.7	579	0.79	432.4	1,372	8.4	237.2	208,982
				去勢・雄	602,270	—	602,270	705.4	27.5	575	0.80	441.2	1,365	8.3	245.5	205,022
				雌	580,835	—	580,835	677.5	28.0	585	0.77	420.6	1,381	8.5	226.0	214,349
	うち、岩手県	22	25.0	平均	592,684	—	592,684	699.6	27.7	596	0.80	437.6	1,354	7.8	225.6	215,195
				去勢・雄	600,444	—	600,444	707.7	27.6	589	0.80	444.7	1,350	7.8	234.7	217,439
				雌	582,238	—	582,238	688.7	27.9	597	0.80	428.1	1,360	7.9	213.4	212,175
	25年度	23	32.1	平均	534,753	—	534,753	685.0	28.3	607	0.76	428.6	1,248	8.1	225.1	160,786
				去勢・雄	536,617	—	536,617	694.5	28.1	603	0.77	435.9	1,231	8.0	228.6	160,275
				雌	532,304	—	532,304	672.6	28.6	611	0.74	419.0	1,270	8.2	220.5	161,458
	うち、岩手県	18	27.2	平均	532,272	—	532,272	688.2	28.7	633	0.75	434.3	1,226	7.6	211.5	159,858
				去勢・雄	533,062	—	533,062	695.2	28.5	628	0.76	440.3	1,211	7.6	217.9	158,378
				雌	531,127	—	531,127	678.1	29.0	637	0.75	425.6	1,248	7.6	202.1	162,004
24年度	23	39.2	平均	471,756	—	471,756	710.5	30.1	659	0.74	445.0	1,060	8.1	223.4	141,083	
			去勢・雄	477,866	—	477,866	722.0	29.9	658	0.75	456.0	1,048	8.0	228.9	134,130	
			雌	462,929	—	462,929	693.9	30.3	661	0.72	429.1	1,079	8.3	215.6	151,127	
うち、岩手県	18	34.7	平均	476,635	—	476,635	729.5	31.3	707	0.73	462.0	1,032	7.7	214.0	146,023	
			去勢・雄	483,438	—	483,438	739.8	31.0	703	0.74	473.2	1,022	7.6	222.1	137,180	
			雌	465,602	—	465,602	712.7	31.6	715	0.72	443.8	1,049	7.8	201.0	160,364	
飼養規模別	1～10頭未満	2	5.5	—	485,963	—	485,963	623.8	25.8	535	0.76	360.8	1,347	8.0	217.5	126,545
	10～20頭	4	6.3	—	544,933	—	544,933	678.3	28.4	618	0.75	402.1	1,355	7.8	212.1	173,244
	20～30頭	5	16.2	—	561,851	—	561,851	644.5	26.0	524	0.84	400.6	1,403	8.6	201.9	150,222
	30～50頭	6	19.5	—	572,521	—	572,521	681.3	26.0	547	0.84	431.7	1,326	7.8	224.1	210,175
	50～100頭	5	32.8	—	584,522	—	584,522	691.1	28.8	632	0.75	444.6	1,315	7.7	215.2	139,995
	100頭以上	5	68.8	—	618,624	—	618,624	713.7	28.2	576	0.78	438.9	1,409	9.0	262.9	260,534

注1: 飼養規模は、肥育の飼養頭数による。

日本短角種の肥育牛販売は、27 経営体全てが相対取引（全 742 頭）となっている（表 10）。

道県内・道県外の割合をみると、道県内が 60.6%、道県外が 39.4%と道県内がやや高くなっている。また、岩手県では県内が 64.2%、県外が 35.8%で、県内の方がやや高くなっている。

相手先割合をみると、ほとんどが法人向け（98.0%）となっており、個人（2.0%）向けはわずかにすぎない。

表 10 日本短角種（肥育牛）の販売先

	全体		相対取引								
	経営 体数	頭数 (頭)	経営 体数	頭数 (頭)	道県内・道県外割合		相手先割合				
					道県内 (%)	道県外 (%)	個人 (%)	法人 (%)	家畜商 (%)	その他 (%)	
26年度	27	742	27	742	60.6	39.4	2.0	98.0	0.0	0.0	
うち、岩手県	22	549	22	549	64.2	35.8	2.7	97.3	0.0	0.0	
25年度	23	738	23	738	54.1	45.9	3.4	96.6	0.0	0.0	
うち、岩手県	18	490	18	490	58.9	41.1	3.1	96.9	0.0	0.0	
24年度	23	902	23	902	51.5	48.5	2.3	97.3	0.4	0.0	
うち、岩手県	18	624	18	624	57.4	42.6	1.8	97.6	0.6	0.0	
飼養規模別	1～10頭未満	2	11	2	11	18.2	81.8	0.0	100.0	0.0	0.0
	10～20頭	4	25	4	25	57.9	42.1	0.0	100.0	0.0	0.0
	20～30頭	5	81	5	81	10.6	89.4	3.0	97.0	0.0	0.0
	30～50頭	6	117	6	117	50.5	49.5	5.2	94.8	0.0	0.0
	50～100頭	5	164	5	164	76.2	23.8	3.2	96.8	0.0	0.0
	100頭以上	5	344	5	344	67.7	32.3	0.3	99.7	0.0	0.0

注：飼養規模は、肥育の飼養頭数による。

4 今後の経営意向と規模拡大の課題・問題点

(1) 今後の経営意向

① 経営意向

今後の経営意向については、「現状維持」(66.7%)が最も高く、現在の水準を維持していきたいと考えていることが分かる。また、「増加」(20.0%)が「減少」(6.7%)及び「生産しない」(6.7%)を上回っている。経営体別に見ると、繁殖経営は「現状維持」が8割以上に対し、肥育経営は「現状維持」が過半程度で、「増加」(25.9%)が「減少」(7.4%)及び「生産しない」(11.1%)を上回っている(図5、表11)。

図5 今後の経営の意向

(%)

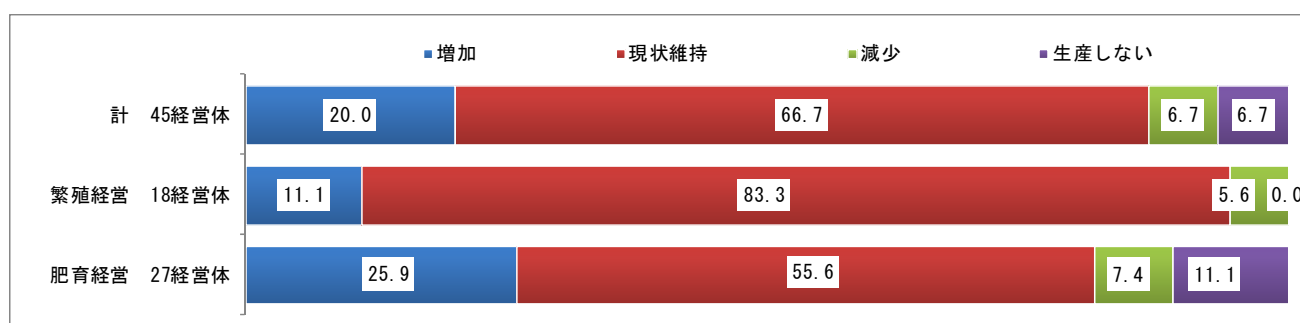


表11 今後の経営の意向

(戸、%)

	回答数	計	増加	現状維持	減少	生産しない
26年度	45	100.0	20.0	66.7	6.7	6.7
繁殖経営	18	100.0	11.1	83.3	5.6	0.0
肥育経営	27	100.0	25.9	55.6	7.4	11.1

②経営拡大の理由

今後の経営意向について「増加」と回答した9経営体はその理由を聞いたところ、「後継牛を確保するため」(44.4%)が最も高く、「繁殖・肥育を行うため」(33.3%)、「出荷先があるため」(22.2%)となっている(図6、表12)。経営体別に見ると、繁殖経営は「後継牛を確保するため」(100.0%)に対し、肥育経営は「繁殖・肥育を行うため」(42.9%)が最も高くなっている。

図6 経営拡大の理由

(%)

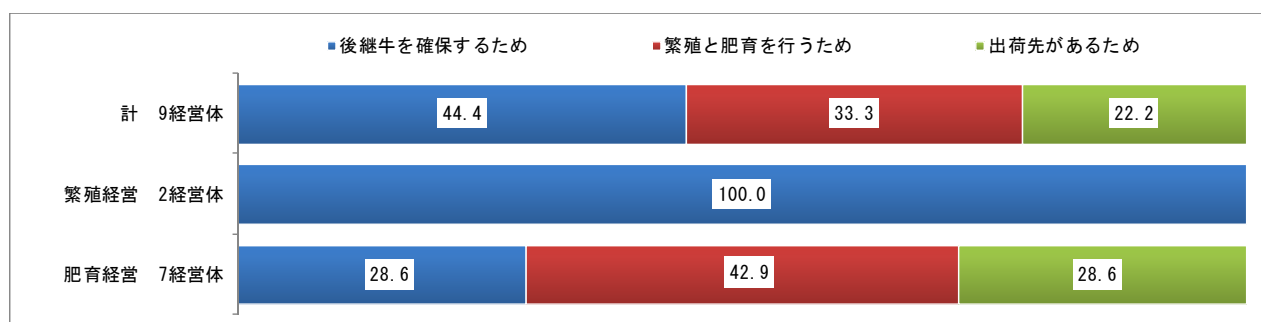


表12 経営拡大の理由

(戸、%)

	回答数	計	後継牛を確保 するため	繁殖と肥育を 行うため	出荷先が あるため
26年度	9	100.0	44.4	33.3	22.2
繁殖経営	2	100.0	100.0	0.0	0.0
肥育経営	7	100.0	28.6	42.9	28.6

③経営縮小の理由

今後の経営意向について「現状維持」、「減少」と回答した33経営体にその理由を聞いたところ、「高齢化」(39.4%)が最も高く、次いで、「施設・設備の老朽化」(33.3%)、「飼料・資材費価格の高騰」(15.2%)となっている(図7、表13)。経営体別に見ると、繁殖経営は「施設・設備の老朽化」(43.8%)が最も高く、次いで、「高齢化」(37.5%)に対し、肥育経営は「高齢化」(41.2%)が最も高く、次いで、「施設・設備の老朽化」及び「その他」(23.5%)となっている。なお、「その他」は子牛価格の高騰であった。

図7 経営縮小及び現状維持の理由

(%)

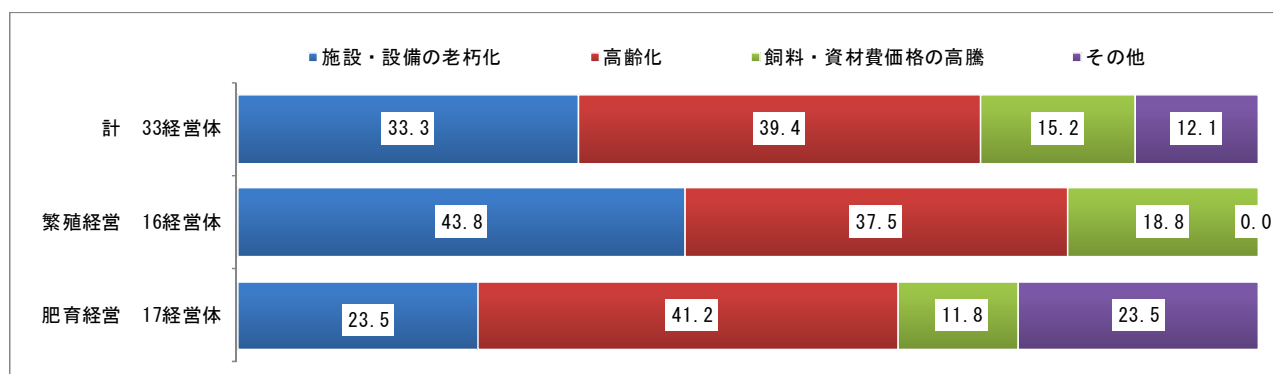


表13 経営縮小及び現状維持の理由

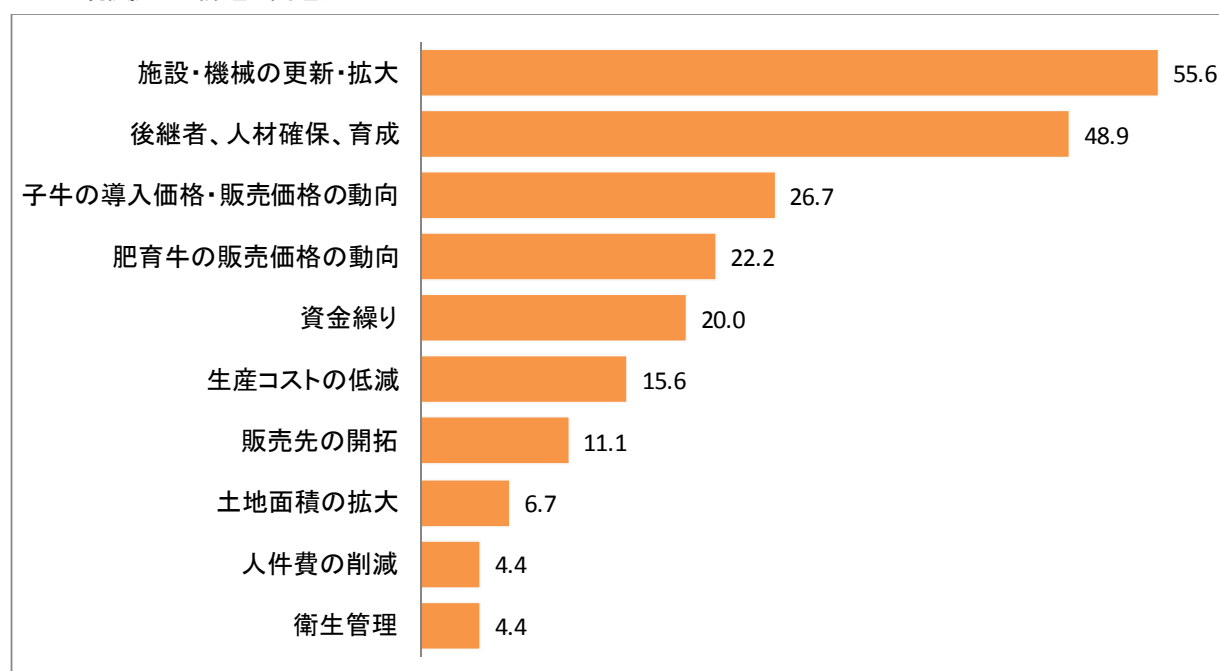
(戸、%)

	回答数	計	施設・設備の老朽化	高齢化	飼料・資材費価格の高騰	その他
26年度	33	100.0	33.3	39.4	15.2	12.1
繁殖経営	16	100.0	43.8	37.5	18.8	0.0
肥育経営	17	100.0	23.5	41.2	11.8	23.5

(2) 規模拡大の課題・問題点

次に、日本短角種の45経営体に規模拡大の課題や問題点について聞いてみた。「施設・機械の更新・拡大」(55.6%)が最も高く、次いで、「後継者、人材確保、育成」(48.9%)、「子牛の導入価格・販売価格の動向」(26.7%)、「肥育牛の販売価格の動向」(22.2%)、「資金繰り」(20.0%)、「生産コストの低減」(15.6%)等となっている。また、経営形態別では、繁殖経営は「施設・機械の更新・拡大」及び「後継者、人材確保、育成」(72.2%)とこれら2つに集中するのに対し、肥育経営は「施設・機械の更新・拡大」(44.4%)が最も高く、次いで、「子牛の導入価格・販売価格の動向」(40.7%)、「肥育牛の販売価格の動向」(37.0%)等比較的ばらつきが見られる(図8、表14)。

図8 規模拡大の課題・問題点 (%)



注：複数回答

表14 規模拡大の課題・問題点

(戸、%)

	回答数	土地面積の拡大	生産コストの低減	人件費の削減	施設・機械の更新・拡大	衛生管理	販売先の開拓	資金繰り	後継者、人材確保、育成	子牛の導入価格・販売価格の動向	肥育牛の販売価格の動向
26年度	45	6.7	15.6	4.4	55.6	4.4	11.1	20.0	48.9	26.7	22.2
繁殖経営	18	0.0	16.7	5.6	72.2	5.6	0.0	5.6	72.2	5.6	0.0
肥育経営	27	11.1	14.8	3.7	44.4	3.7	18.5	29.6	33.3	40.7	37.0

注：複数回答

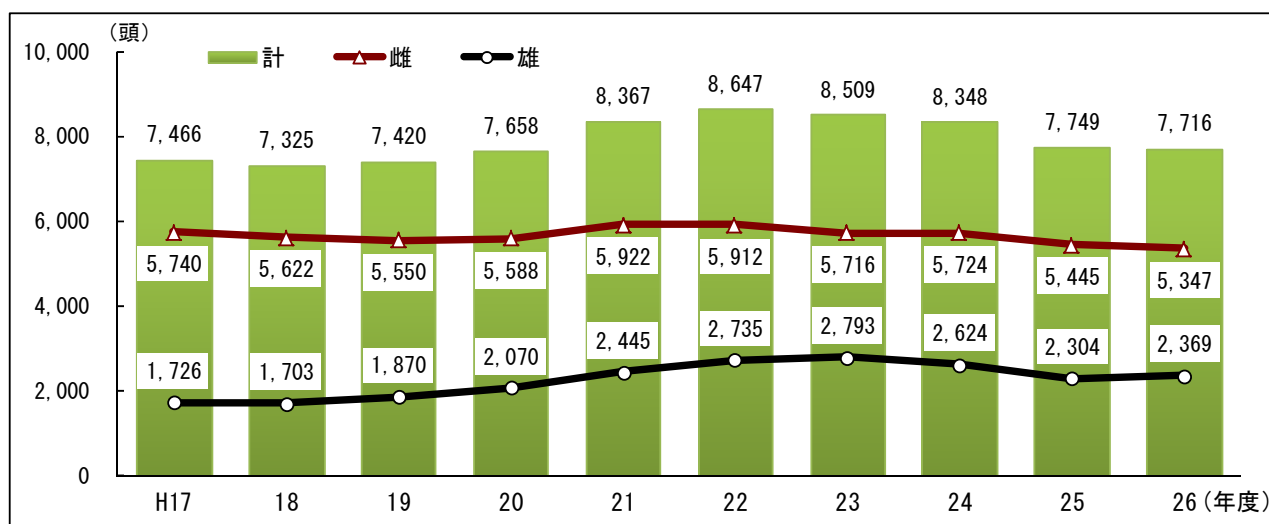
II 日本短角種の経営動向

1 日本短角種の飼養動向

(1) 全国の飼養動向

平成26年度の日本短角種の全国の飼養頭数は、7,716頭となっている(図9)。過去の推移をみると、平成21年度から24年度までは8,000頭台で推移していたが、25年度からは再び7,000頭台となった。これは、後継者不足による廃業や規模縮小等によるものと考えられる。

図9 日本短角種の飼養頭数の推移(全国)



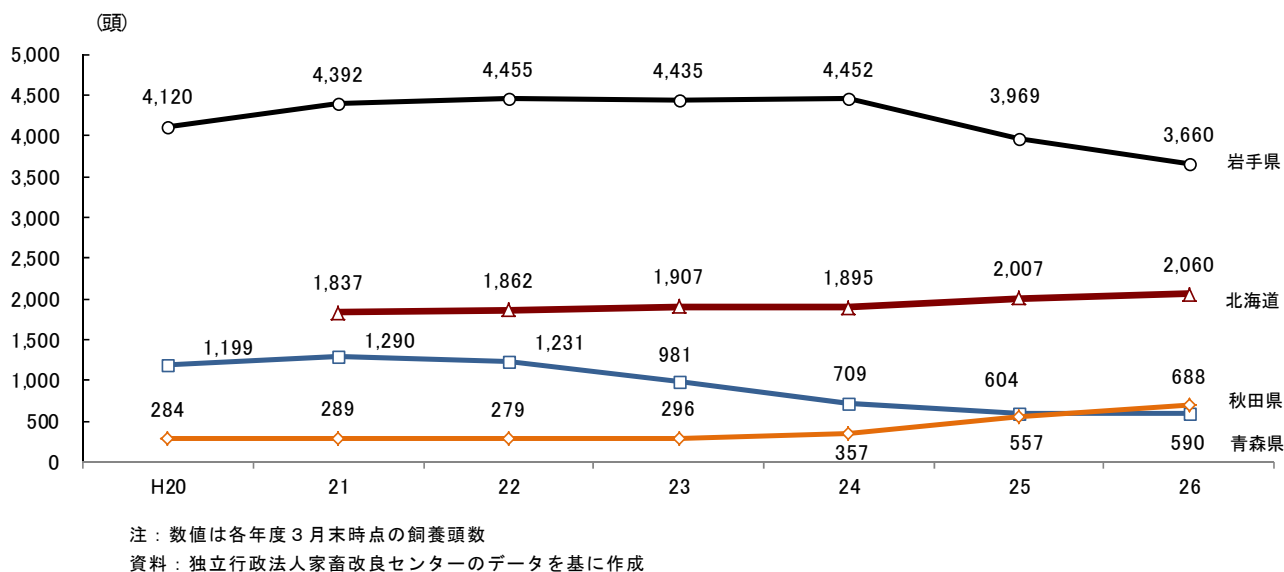
注：数値は各年度3月末時点の飼養頭数

資料：独立行政法人家畜改良センターのデータを基に作成

主産県別の飼養頭数をみると、岩手県が3,660頭(全飼養頭数の47.4%)で最も多く、次いで、北海道2,060頭(同26.7%)、秋田県688頭(同8.9%)、青森県590頭(同7.6%)となっている(図10)。日本短角種の生産は、北海道・東北地方に集中しており、これら4県で全国の飼養頭数の9割以上を占めている。

ここ数年の推移をみると、秋田県が増加傾向、青森県は減少傾向にある。一方で、北海道は緩やかな増加傾向で推移している。岩手県については平成24年度まではほぼ横ばいで推移していたものの、平成25年度以降は減少傾向が著しい(図10)。

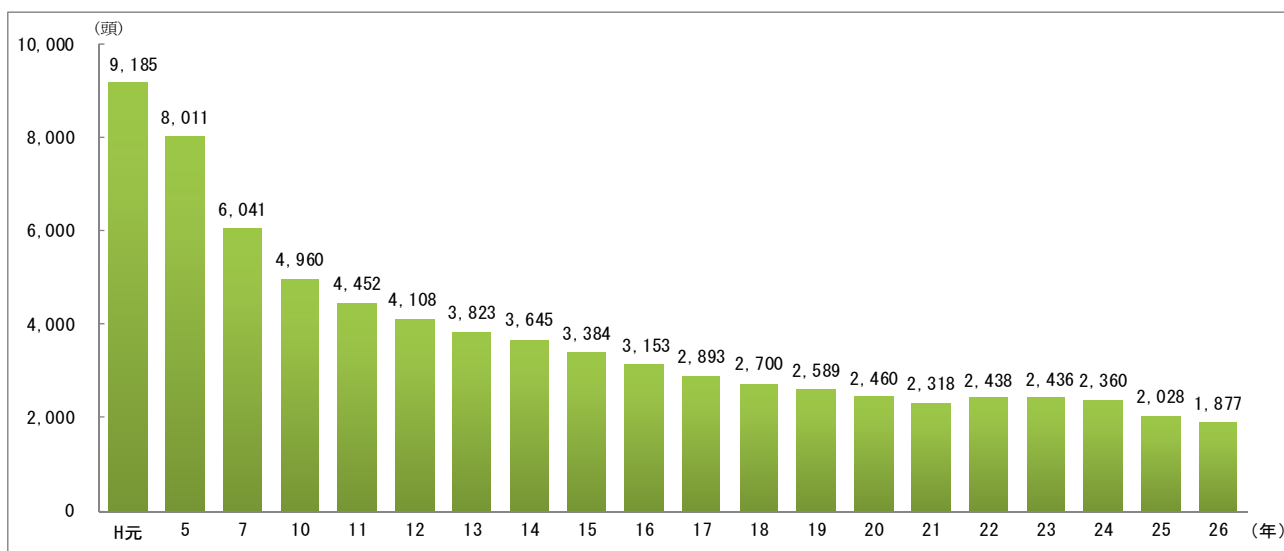
図10 日本短角種の飼養頭数の推移（主産県別）



(2) 岩手県の飼養動向

日本短角種の主産地である岩手県の繁殖雌牛の飼養頭数は、平成元年には9,185頭であったが、年々減少し、平成26年には1,877頭と大きく減少している（図11）。対前年比で151頭の減少となっている。長期トレンドで見ると、平成3年度の牛肉輸入自由化以降の輸入牛肉の需要拡大及び国内生産における黒毛和種への移行が要因と考えられる。

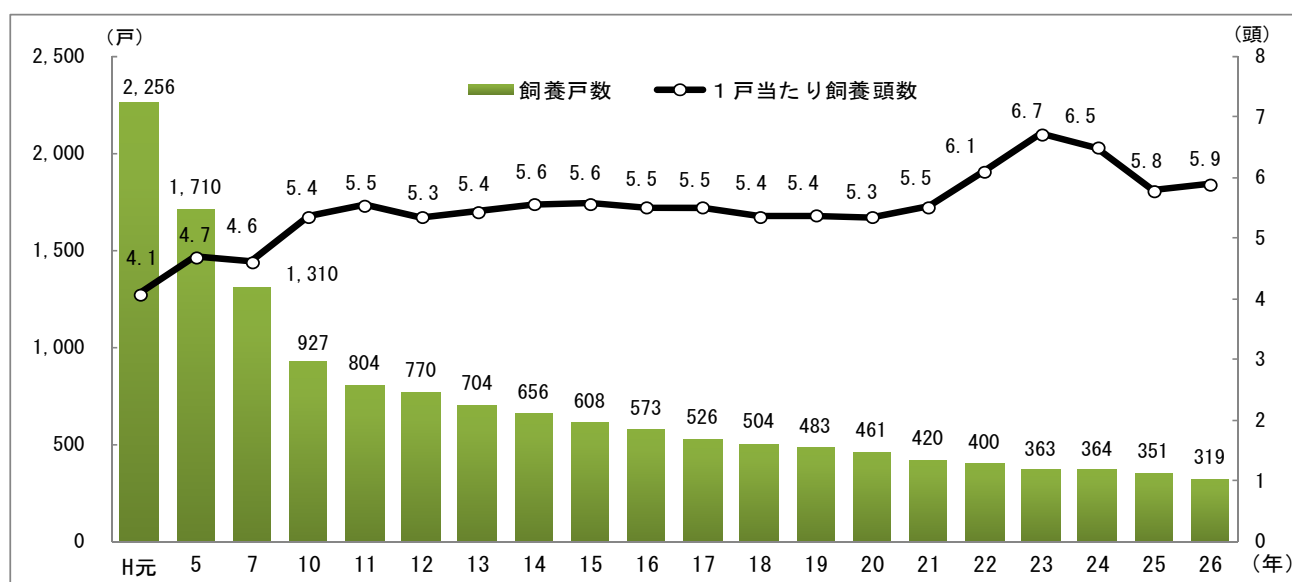
図11 日本短角種繁殖雌牛の飼養頭数の推移（岩手県）



岩手県の繁殖雌牛の飼養戸数は、平成元年には 2,256 戸であったが、年々減少し、平成 26 年には 319 戸と大きく減少している（図 12）。

一方、平成 26 年の繁殖経営 1 戸当たり飼養頭数は、平成元年の 4.1 頭から平成 23 年の 6.7 頭をピークに、平成 26 年には 5.9 頭となっている。1 戸当たり飼養頭数は他の肉用牛の飼養規模に比べて小さい（農林水産省の「平成 26 年畜産統計調査」による肉用牛繁殖経営の 1 戸当たり飼養頭数は 11.9 頭。）これは、日本短角種の繁殖経営が放牧主体の飼養形態であることから規模拡大が難しいことなどが考えられる。

図 12 日本短角種繁殖雌牛の飼養戸数と 1 戸当たり飼養頭数の推移（岩手県）

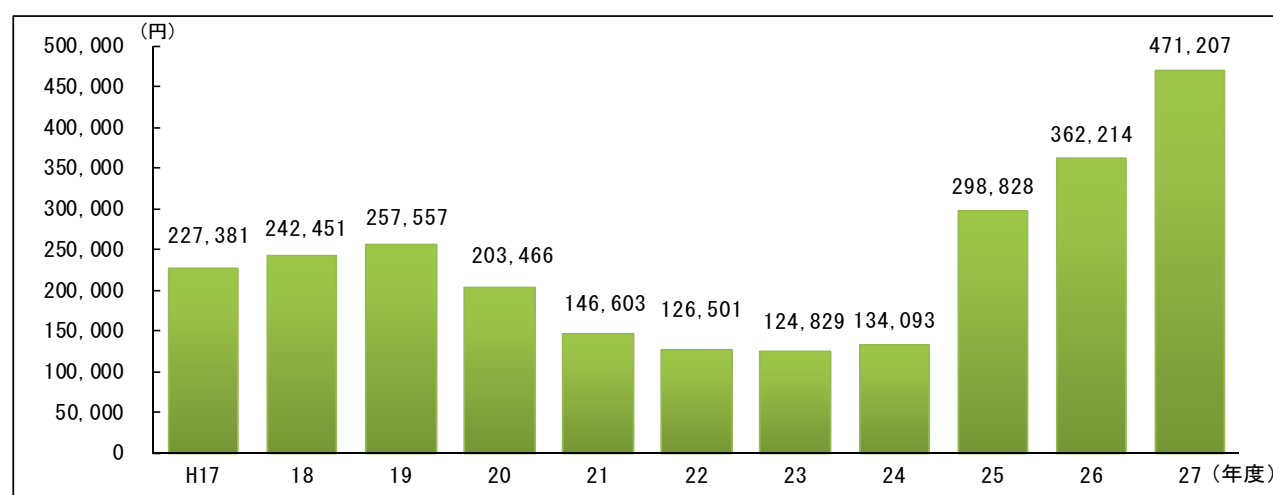


資料：岩手県畜産課のデータを基に作成

2 日本短角種の子牛価格動向

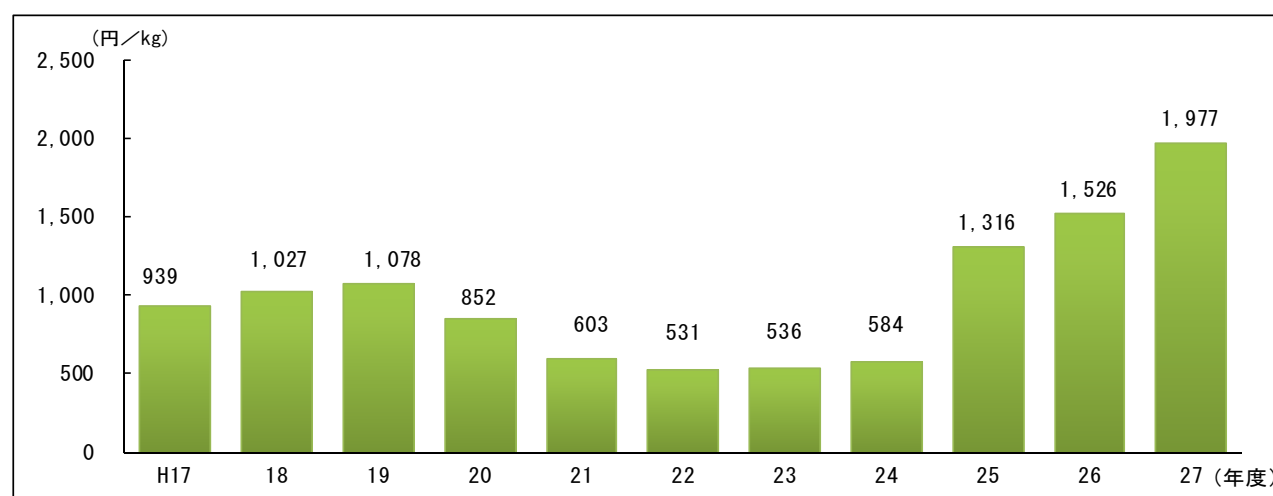
平成 27 年度（4～12 月計）の家畜市場における日本短角種子牛 1 頭当たり取引価格は、471,207 円（前年度 362,214 円）であり、24 年度から 25 年度にかけて 2 倍以上に上昇した後、さらに上昇を続けている（図 13）。また、生体 1kg 当たり価格についても、平成 27 年度は 1,977 円であり、前年度を上回った（図 14）。日本短角種の 1 頭当たり及び生体 1kg 当たり価格が大幅に上昇したのは、黒毛和種の子牛の出荷頭数減から子牛価格が上昇し、これに連動したことなどが考えられる。

図 13 日本短角種子牛価格の推移（1 頭当たり・雄雌平均）



注：平成27年度は4月から12月までの合計値
資料：（独）農畜産業振興機構「肉用子牛取引情報」

図 14 日本短角種子牛価格の推移（生体 1kg 当たり・雄雌平均）

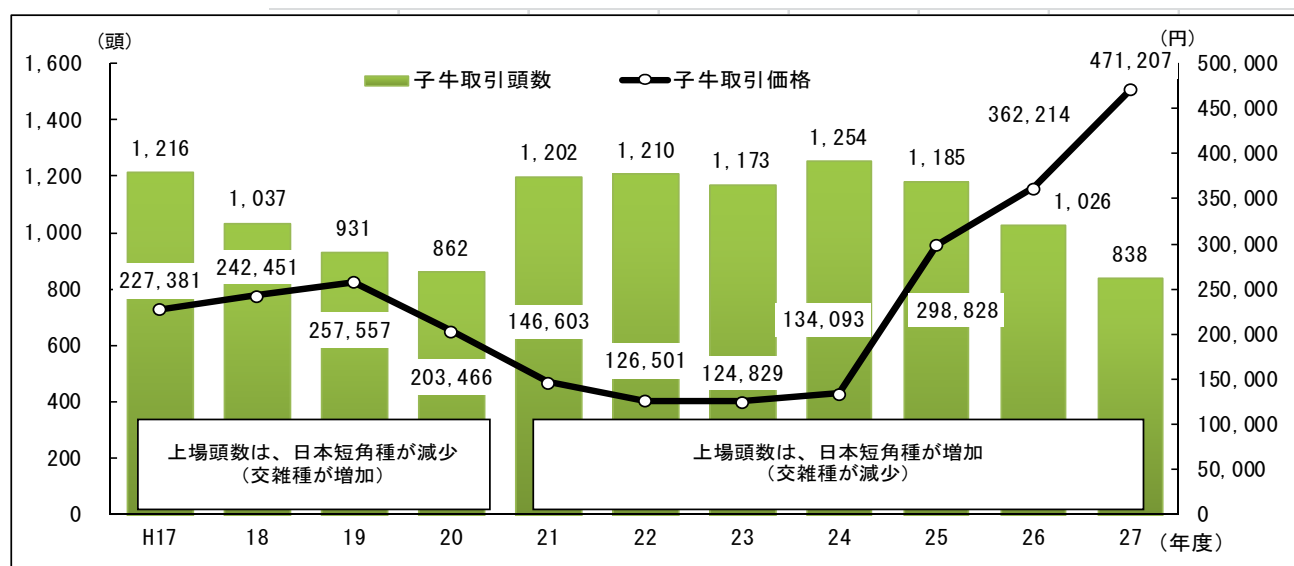


注：平成27年度は4月から12月までの合計値
資料：（独）農畜産業振興機構「肉用子牛取引情報」

平成27年度（4～12月計）の家畜市場における日本短角種の取引頭数は838頭となっており、前年度比18.3%減少している（図15）。

取引頭数は、平成17年度から平成20年度まで減少傾向で推移したものの、平成21年度には1,202頭に回復した。以降は1000頭台で推移していたが、27年度は838頭に減少した。日本短角種の繁殖経営において、近年、黒毛和種との交雑種（短黒F1）の方が純粋種に比べて取引価格が高いことから、純粋種の出荷頭数を上回っていた。しかし、平成20年度以降、交雑種の相場が低迷したことから、その出荷頭数が減少し、純粋種への回帰がみられたものの、平成25年度以降、後継者不足による廃業や規模縮小等により純粋種の減少が著しい。

図15 日本短角種子牛取引価格と取引頭数の推移



注：平成27年度は4月から12月までの合計値
資料：（独）農畜産業振興機構「肉用子牛取引情報」

3 日本短角種の収益性

(1) 繁殖経営

繁殖経営において収益を左右するのは、子牛販売価格及び生産費のうち特に割合の高い飼料費、次いで、減価償却費、放牧預託費・種付費である。

子牛販売価格は、平成21年度から平成24年度まで15万円以下で推移していたが、25年度は298,828円と急上昇し、26年度は362,214円、さらに、27年度は471,207円となっており（図13参照）、繁殖経営の収益性が向上していることがうかがわれる。

ここでは、子牛販売価格の変動を3つのパターンに分けて、1頭当たりの経営収支について試算してみる。なお、生産費の各経費は26年度のデータ（本年度調査結果）を用いた。

ケース1の子牛販売価格が300千円の場合、1頭当たりの所得は105.8千円となり、労働費はほぼ全額が確保される（図16）。

ケース2の子牛販売価格が400千円の場合、1頭当たりの所得は205.8千円となり、労働費は全額が確保される（図17）。

ケース3の子牛販売価格が500千円の場合、1頭当たりの所得は305.8千円となり、労働費は全額が確保される（図18）。

直近の子牛販売価格は50万円弱となっており、上記のケース3に最も近い状況である。この場合、黒字経営となることから、繁殖農家の飼養頭数の高まりが期待される。

今後は、日本短角種の子牛価格の安定と繁殖経営のコスト低減などの取組が課題といえる。

図16 (ケース1) 子牛販売価格が300千円の場合

■ 1頭当たりの所得は、105.8千円

■ 1頭当たりの収支は、労働費分▲3.6千円の赤字

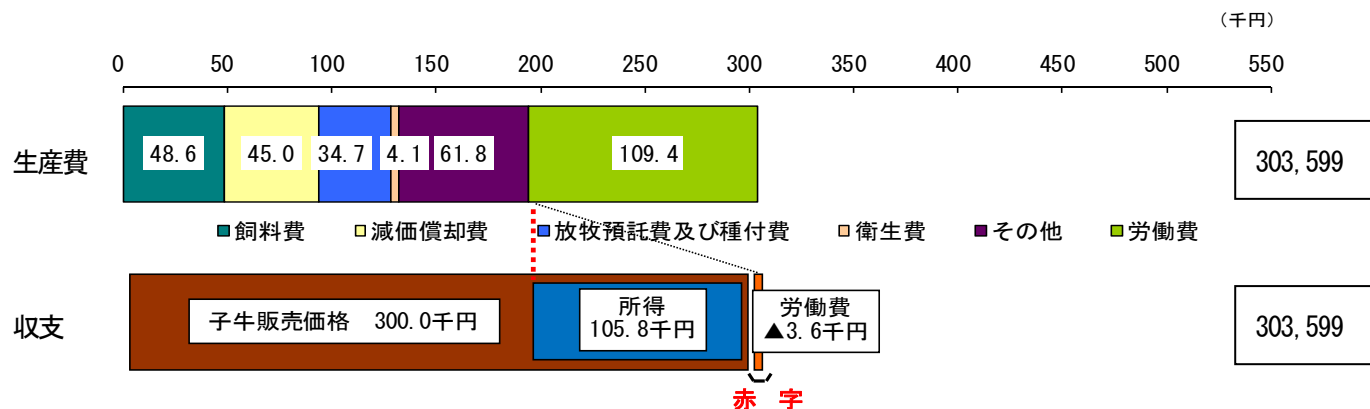


図17 (ケース2) 子牛販売価格が400千円の場合

■ 1頭当たりの所得は、205.8千円

■ 1頭当たりの収支は、96.4千円の黒字

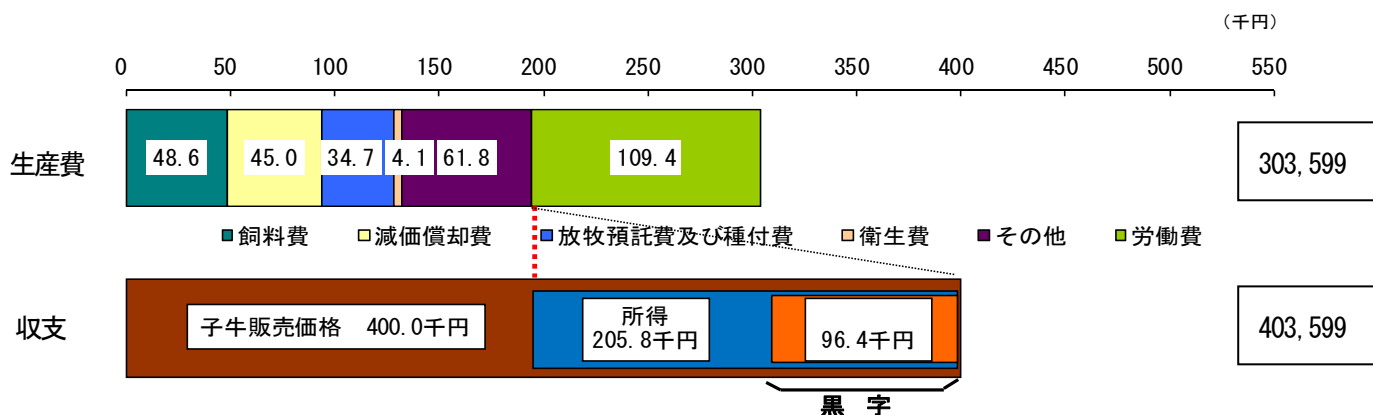
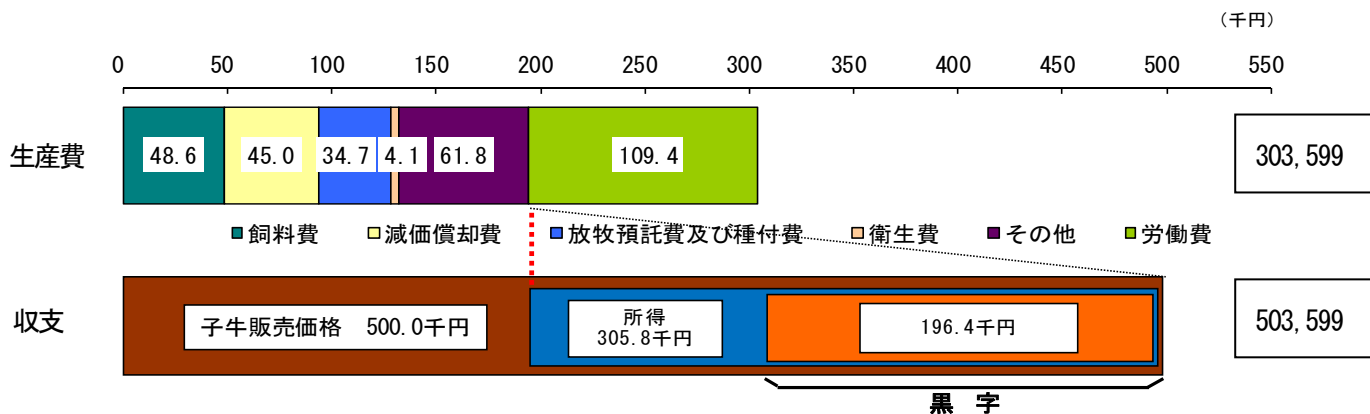


図18 (ケース3) 子牛販売価格が500千円の場合

■ 1頭当たりの所得は、305.8千円

■ 1頭当たりの収支は、196.4千円の黒字



4 日本短角種の生産・流通の現状と課題

もと畜費の高騰により生産コストは増加傾向

肉用子牛の価格は、子取り用雌牛の減少により子牛の分娩頭数が減少したことに加え枝肉価格が上昇したことから、上昇傾向で推移している。日本短角種でも平成25年度以降、飼養頭数の減少などを背景に子牛の出荷頭数が減少し、子牛価格が高騰している。肉用子牛の繁殖経営の収益性は大幅に改善している一方、特に黒毛和種に比べ枝肉価格も安く、枝肉重量も小さい日本短角種の肥育経営は、もと畜費の高騰により生産コストは増加傾向にあり、日本短角種の生産の維持・拡大を図るためには、今一層の繁殖・肥育一貫経営化の推進が課題といえる。

日本短角種の繁殖経営は、従来からの地域資源を活かした放牧主体の飼養が主体となっているが、近年、大型の繁殖・肥育一貫経営も増加している点が大きな特徴といえる。肥育部門については、放牧、自給飼料（牧乾草・デントコーンサイレージ等）、濃厚飼料の給与体系が生産者により異なっており、日本短角種の飼養管理の多様性を示す一方で、生産コストや肉質などのばらつきをもたらす要因ともなり、短角種としての統一的な販売促進の制限要因ともなり得る。このため、飼養管理に応じた肉質の特徴をアピールしていくことが、今後の流通販売の課題になるものと思われる。

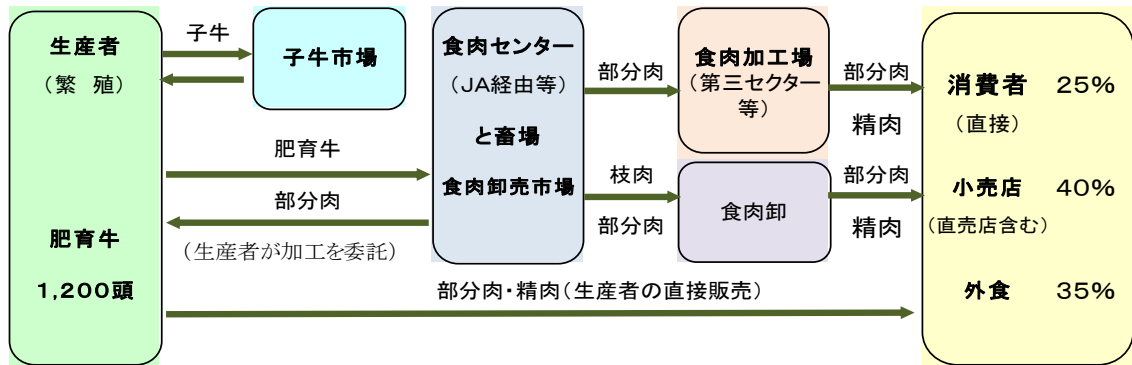
生産流通の現状

平成26年度の本調査によれば、北海道、青森県、岩手県、秋田県の調査により把握した肥育牛の出荷頭数は1,200頭となっている。この頭数は小規模な産地銘柄和牛と同等の水準といえる。地域別にみると、北海道は農業生産法人が生産流通の担い手であり、自ら販売も行っている。青森県と秋田県は特に生産者団体が繁殖・肥育一貫経営に取り組んでおり、地域の特産品として位置付けている。岩手県は繁殖・肥育の主要な産地において第三セクターによる食肉加工場及び直売所が整備され、地域の基幹産業の一つとして位置付けている。

このように、市町村単位における取り組みや農業生産法人等の6次産業化などが主体となっているため、肥育牛の生産及び出荷ロットがきわめて小さいことが特徴となっており、今後の生産ロットの維持・拡大を実現するためにも、日本短角種の地域算定の実施など、経営安定対策の充実・強化が重要である。

需要面についてみると、出荷頭数が大きく減少する中で、地域内の消費者の認知度が上昇し、地域内消費の割合が大都市圏と比べて相対的に上昇している傾向がみられる。地域における直売店、道の駅、アンテナショップなどの取扱量が増加し、地域内での消費が浸透してきたことが一因とみられる。

図19 日本短角種の主な流通経路



注：肥育牛の出荷頭数は4道県の生産者、生産者団体の調査結果から把握したもの。
需要構成比は、生産者、生産者団体の調査結果から推計したもの。

資料：平成26年度日本短角種の経営に関する調査報告書の一部修正し再掲

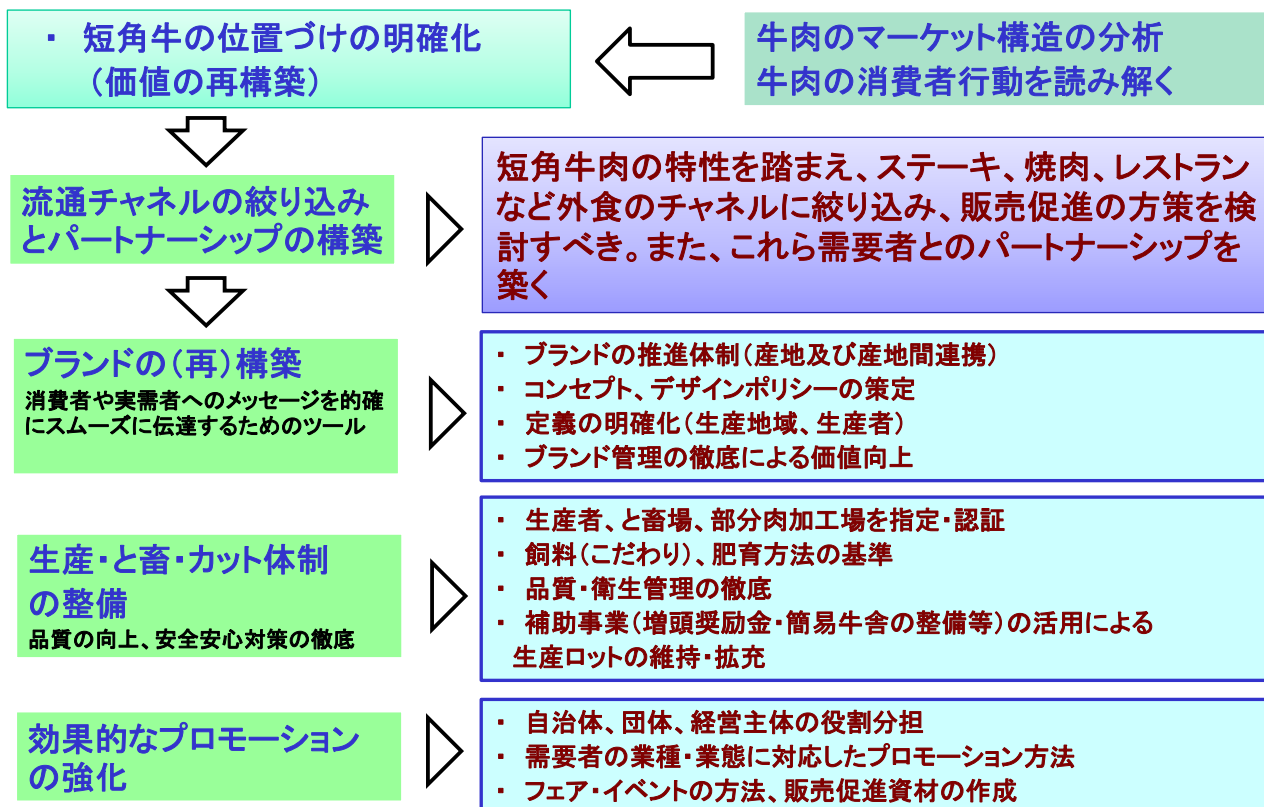
特産としての価値の再構築に向けて

日本短角種の市場評価は、一部の生産者、生産者グループが独自のルートで高単価を実現しているものの、総じて、交雑種B3並みにとどまっており、価値提案の取組が急務となっている。

日本短角種は、消費者の赤身志向・自然志向の高まりから、需要者や消費者の認知度も向上しつつある。しかし、日本短角種は黒毛和種に比べ、調理方法が十分に確立されていないこと、また、脂肪交雑が少ない外見を考慮すると、消費者への直接販売や小売よりも熟成肉での活用など外食需要の拡大が期待される。今後はこの肉質の特性を踏まえ、外食需要者とのパートナーシップをいかに築いていくかが課題の一つといえる。

日本短角種の認知度向上及び価値提案については、生産者と加工流通及び販売の一連の関係者が連携するとともに、地域の自治体等が参画し、プロモーション活動の展開を強化する必要があると思われる。これらは個別ルートでできること、日本短角種と統一的に関係者全体でできることに分けて取り組むべきものと考えられる。

図20 日本短角種の生産・流通の再構築に向けて



資料：平成26年度日本短角種の経営に関する調査報告書を一部修正し再掲